

沿革・土地・気象

1. 沿革

古代 阿波の忌部氏が今の安房の地に上陸し、粟、麻、木綿の栽培法を教えたので粟に基いて阿波にちなみ「安房」の名が起り、麻のよくそだつ国を「総」の国といった。後に都に近い所を上総かみ、遠いのを下総しもといった。こうして安房、上総、下総の三国が定まったのである。

上代 大化改新以後それぞれの国には国司の役所が置かれ、その所在地は安房国府（安房郡三芳村）上総国府（市原市）下総国府（市川市国府台）であった。蝦夷経営の要地として軍団が設けられ駅の制度も整っていた。そして奈良時代にはこの三国にそれぞれ国分寺が建立されて地方文化の中心となったようである。

平安時代には地方政治が紊乱して、天慶年間には平将門の乱が起りついで平忠常も反乱を起したが源頼信に降り、のち上総介に任ぜられ、子孫は前九年、後三年の両役に軍功があって、両総の権介となり、千葉氏、上総氏として権威を両総に振った。

中世 源頼朝が鎌倉に幕府を開くことに先立って千葉常胤、上総介広常の功があり房総に大きな勢力を占めていた。のち北条、吉野の時代を経て、室町、戦国時代となり中央政権の争奪戦や関東管領かんとうかんりょうの対立抗戦の中に巻きこまれたので、房総の地は四分五裂して人民は大いに苦しんだのであった。

近世 豊臣秀吉が天下を統一し関東の地を家康に与え、次いで家康が江戸に幕府を開くと、房総の地はお膝下として重要であるためあるいは直領じきりょうを置き、あるいは佐倉藩をはじめ譜代の小藩を分立せしめて大同団結を禁じた。初期には9藩、幕末には16藩、明治初年には24藩であった。

現代 明治元年、王政復古の大業が成ると上総安房県と下総県とがおかれ、2年には葛飾県みやぎくと宮谷県とが新設され、同年6月藩籍奉還によって旧藩主は藩知事となり、4年7月廃藩置県によって県となった。

安房では館山県ほか3県、上総は大多喜県ほか10県、下総は佐倉県ほか6県、更に同年11月改めて上総、安房両国を合せて木更津県を、下総国には印旛県をおき、6年6月木更津、印旛の両県を廃して千葉県となし県庁を千葉町においた。

8年5月新治県所管の香取、匝瑳、海上の3郡が千葉県の管地となり、7月には葛飾郡の一部を埼玉県と東京府に、香取郡の一部を茨城県に割いて江戸川、利根川を境界とする現在の千葉県の境域が決定した。